

地獄變と六道繪

家 永 三 郎

曾て私は「地獄變」(雜誌歴史地理及び拙著上代佛教思想史研究所收)と題する小論を發表し専ら平安朝を中心とする地獄變關係の史實を紹介すると共に思想的觀點から卑見を述べたことがあるが、その際論述を保留したことがらやその後提起された問題もあるので、ここに稿を新にして再びこの問題を取り上げ、特に美術史學界の叱正を仰ぐこととした。

地獄變の源流

本邦に於ける地獄變の源流を追ふ時は平安朝から寧樂朝に及び、更に海を越えて大陸に達する。松本文三郎博士の「支那佛教遺物」に據れば、龍門の石窟には天曹地府午頭獄卒像、閻婆王南斗北辰像の如きものがあるとのことである。これは彫刻であるが、繪畫の例を求めると、歴代名畫記の記兩京外州寺觀畫壁の章下に

慈恩寺……塔之東南中門外偏。張孝師畫「地獄變」。已剝落。
寶利寺……西廊、陳靜眼畫「地獄變」。

地獄變と六道繪

三階院……東壁。張孝師畫「地獄變」。杜懷亮書「勝子」。
景公寺……中門之東。吳畫「地獄并題」。
化度寺……盧稜伽畫「地獄變」。今殘兩頭少許耳。
敍歷代能畫人名の章下には

武靜藏……東都敬愛寺東山亭院地獄變畫。甚妙。

とあり、又續高僧傳卷廿三釋靜謐傳に

甬爲「書生」……遊「寺觀」地獄圖變、「願」諸生「曰」、異哉、審業理之必然、「誰有「免」斯酷「者」」。

と見えて、唐代の諸寺に盛に地獄變の畫かれたことを示してゐる。歴代名畫記後章にはその外地獄を善く畫く人として李生、陳靜心等の名を擧げて居り、宣和畫譜にも唐末の人朱繇の作の御府に藏せるものの内地獄變相一あることを告げてゐる。歴代名畫記に據れば、張孝師「曾死、復蘇、具見「冥中事」。故備得之。吳道玄見「其畫」、因號爲「地獄變」と云ふ。けれど勿論これが地獄變の淵源となつたのではない。其源流は更に燉煌から西域を経て、印度に迄達するの

である。燉煌發見の紙本十王經圖卷は大英博物館に二種、本邦に一種を存するが、何れも閻魔王、獄卒、枷械を加へられた罪人等を畫き、所謂地獄變と稱するものではないけれど、唐代地獄繪の大體を類推することが出来る。更に吐魯蕃の Bezeklik 壁畫にも、地獄を始め六道の苦相を畫いた貴重なる遺品あり（松本榮一博士「燉煌畫の」研究「四〇二頁以下参照」）、更に遡つては印度アジャンタの第十七窟にも地獄變壁畫を認めるのであるが、今そこ迄追求することは姑くやめ、たちかへつて本邦に於けるその發達を通覽してみようと思ふ。

寧樂時代の六道藝術

我が國に於ける地獄畫の最古の實例は東大寺二月堂光背毛彫圖中に見出され、火焰の如きものの間に鬼形の畫かれてゐるのを見るのであるが（圖版第四參看）、これにより寧樂朝の頃既に地獄の繪畫的表現の試みられたことが分るのであつて、これを萬葉集の

相念はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に類づくが如し（卷四笠女郎歌）

寺寺の女餓鬼申さく大神の男餓鬼給りて其の子播まはむ（卷十六池田朝臣歌）

と云ふ歌により知られる處の當時大安寺（「大寺」はすなはち大安寺）等諸寺院に餓鬼形の彫像の置かれてゐた事實や、興福寺本日本靈異記に河内國の沙彌尼が知識を率ゐて「敬畫像、其中圖六道」して平群山寺に安置したといふ話（上卷第卅五）の見えることと併せ考へ、六道思想の藝術的表現のかなり古い時代に遡ることの確認せ

られるのは興味が深い。

平安時代の地獄變

二月堂光背毛彫以後地獄圖の遺品は平安後期中尊寺經に至る迄永く迹を絶ち、唯文獻によつて滅び去つた多くの作品の存在を偲ぶ外途がないのである。日本高僧傳要文抄に引く尊意贈僧正傳に據れば、

貞觀十八年七月十五日生年十一、參鴨河東吉田寺見佛。後壁有地獄畫。其中國繪造罪之人受苦之相。忽捨遊樂之心、即發入山之志。

と。これが恐らく地獄畫に關する我が國最古の文獻であらう。贈僧正傳の成立等については今詳にし難いが、續群書類從に收められた首闕の全本に就いて見るも、記事概して正確の如くであるから、この記事も前引靜藹の逸話に酷似してゐる點類型的説話の踏襲たる疑なきにあらねど、まづ客觀的史實と認めて差支へあるまい。これによつて當時唐代のそれと同様、京洛の寺院に地獄變の畫壁のあつたことが窺はれる。この後巨勢廣高が長樂寺に籠り、「堂ノ後ニ有ケル壁板ニ徒也ケルママニ地獄繪ヲナム書タリケル」と云ふことが今昔物語卷卅一に見え、辨乳母集（辨乳母とは仁安二年に薨じた藤原顯綱の女で、二條院宣旨とも呼ばれる）にも

おなじ宮程なくうせさせ給ひての御忌に、姫宮の御まへ御堂におはしまししに、十さいだうの地ごくのゑを人々よむに、

と題する歌があり、平安時代の寺院には屢々地獄變の畫壁が存した

らしい。建永二年七月攝津國佛照山堂供養願文（攝津徴七十八所收願文集）に講堂の「佛後壁奉_レ圖_二繪釋迦八相并大地獄等_一」と見えて、寺堂の佛後壁に地獄繪を畫く傳統が鎌倉時代に至るまでつづいてゐたことを確め得るのである。

然しながらこの時代の貴族階級の人々にとつて最も親しい關係をもち、其精神生活に影響を與へたのは、寺壁の地獄變であるよりも、むしろ内裏の佛名會に使用せられた地獄變屏風であつた。政事要略年中行事御佛名事條に引く藏人式には

（仁壽殿）
孫廂南第一間至第六間立御屏風六帖。亦南妻立_二一帖。_{並地獄御屏風。}

とあり、又雲圖抄十二月十九日御佛名の條にも

以_二地獄變御屏風七帖立_二七ヶ間_一也。

とあつて、佛名會には地獄屏風を立てることが恒例となつてゐた。

佛名會は、續日本後紀承和五年十二月己亥條に「天皇於_二清涼殿_一修_二佛名懺悔_一。……内裏佛名懺悔自此而始」とある通り、仁明天皇の創始し給ふ處であるが、地獄屏風がこの頃から既に存在したかどうかは知り難く、唯藏人式（侍中群要に據れば、寛平二年の撰進）に見えることにより寛平二年以前に既に存在したことを確認し得るに過ぎない。其實際に使用された例としては北山抄年中要抄御佛名事の條に

（天曆）
同九年十二月廿二日……仰_二侍臣_一令_レ撤_二地獄變御屏風_一。

と見えるのを以て最初とする。その後永延二年の「しはすの十九日になりぬれば、御佛名とて地獄ゑの御屏風などとうでてしつら」つ

たことが榮花物語さま／＼のよろこびに見え、枕草子にも「御佛名のまたのひ、ちこくゑの御屏風とりわたして」皇后定子の台覽に供したことが記されてゐる（前田家本の書入にはこのことを正暦三四年のことと注して居り、金子元臣氏の評釋には伊周を大納言と呼んでゐることによつて正暦四年十二月廿二日の事に比定してゐる）。更に下つて平記所收時信記天承元年十二月十九日の條に

今日御佛名也。昆明池障子押南間、爲_二後隔_一東立_二地獄變御屏風_一。

兵範記長承元年十二月廿二日條の宮御佛名の記事に

簀子自_二東第一間迄_一第五間立_二地獄變御屏風_一。副_二南欄_一立_レ之。

同書承安元年十二月廿一日條に

參_二皇嘉門院_一。依_二御佛名催_一也。……南弘庇立_二地獄變御屏風_一。

勘仲記建治二年十二月廿五日條新陽明門院御佛名の記事に

先_レ之隆輔朝臣於_二地獄變御屏風西頭_一跪問_レ之。

とあつて、平安末期から鎌倉時代に至るまで、内裏院宮等の御佛名に常に出用されてゐたことが知られる（後引建武年中行事の文に據れば、鎌倉末にはもはや用ゐられなくなつたらしい）。勘仲記の記事には別に指圖があつて、母屋に曼陀羅を掲げ、庇に公卿殿上人の座をしつらへ、その背後に恰も本尊の曼陀羅と相對して地獄屏風が立てられたことを示してゐるのである。蓋し佛名會は佛名經の所説に従ひ三世の諸佛の前に懺悔して滅罪を祈る行事であつて、我が上代に行はれた十六卷の佛名經には各卷の終に寶達經の地獄説を配し、地獄の痛苦を明にすることによつて罪の懺悔を促す仕組みにな

つてゐた（和歌森太郎氏「佛名會の成立」修驗道史 及び後引小林太市郎氏論文参照）。從つて佛名會に地獄屏風の用ゐられることは然るべき由來があつたのであつて、ことに懺悔の對象である本尊と地獄屏風の相對してゐる點も、かく考へれば頗る意味深い配置と云ふべきではあるまいか。元來地獄變が佛畫の一種であるにも拘はらず屏風に畫かれたことは頗る異例であつて、その畫風の如きも佛畫の様に拘束された形式のものではなく、相當自由なものであつたに相違ない。佛像と異なり人形を多く畫き、種々複雑なる構圖を配する爲めには、

其處に佛畫よりも世俗畫に近い藝術の様式が要求されたことと考へられ、この點中尊寺經や平家納經等の經卷見返繪の如き佛畫と世俗畫との中間に位するものを成立せしめたと推察せられる。それからあらぬか、地獄屏風の執筆者は佛師よりも畫師が多かつたらしく、後述の通り巨勢廣高が地獄屏風を畫いたことの傳へられる外、御堂關白記長和四年十二月十九日條にも

地獄變御屏風畫師等賜祿。

と記されてゐる（この記事は、その日附から考へ、當然佛名會の爲めの屏風製作に關するものと認められる）。因みに陽明文庫所藏兵範記裏文書仁安三年正月十日附中原廣經の申文に

請殊蒙天恩、因准先例、依進納地獄繪御屏風用途料准絹參仟佰疋二功、被拜任中務少承闕狀

とあり、院政時代に於ける地獄變屏風製作の經濟的背景の窺はれるのは興味深い事實である。猶地獄屏風は佛畫の域を脱するに近きも

のではあつたが、さりとて倭繪の範疇には到底入り難く、春記長曆三年閏十二月十九日條に

今日御佛名始也。……但地獄變御屏風未調出。仍立太宗御屏風。

とあり、年中行事秘抄にこのことを記して「故實也」と云ひ、建武年中行事御佛名條に

ひさしに地獄へんの屏風をたつ。いまの世は大宋の屏風なり。

と記され、雲圖抄にも

或書云、若無（地獄）御屏風之時、用漢書御屏風。

と註してゐる通り、太宗屏風や漢書屏風と代換し得らるる性質のもの、換言すればこれらと同じく唐繪屏風の一種と見なされてゐたのであらう。

平安朝地獄變の圖樣

地獄屏風の繪様を具體的に窺ふべき史料としては、古今著聞集に（巨勢）「弘高地獄變の屏風をかきけるに、樓の上より梓をさしおろして人をさしたる鬼をかきたりける」とあるのが（若しこの記事が信用に値するとすれば）唯一のものであつて、他にその畫面を記述した文獻は一もない。しかし次に掲げる和歌の類によつて、我々は、屏風繪であるか壁畫であるか、はた紙畫であるかは分らないけれど、平安時代に於ける地獄畫の種々の圖様を斷片的にとらへることができるのである。まづ拾遺集雜下に

地獄のかたかきたるを見て

菅原道雅女

みつせ川渡るみさをもなかりけりなにに衣を脱ぎてかくらむ
金葉集雜下に

地獄繪につるぎのえだに人のつらぬかれたるをみてよめる

和泉式部

あさましやつるぎのえだのたわむまでいかなるつみのなれるなるらん
赤染衛門集に

地ごくゑにはかりに人をかけたるをみて

罪はよに重き物ぞとききしかどいとかはかりは思はざりしを

辨乳母集に（これは和泉式部の歌を本歌としてゐる）

（上略前引）十さいだうの地ごくのゑを人々よむに、十八日つるぎに

人のつらぬかれたるを

いかにせん劍の枝のたはむまでおもきはつみのなれるなりけり

又同書（新續古今集にも出づ）に

繪に死出の山に鬼に追はれて女のなきてこゆるありし

つくりこし罪をともにてくる人もなく越るしでの山哉

更に昭和四年公にされた伊達家所藏西行の聞書集に見える「地獄ゑを見て」と題する一大連作は地獄變の繪様に關する文獻として最も詳細なるものである。この連作の内數首は夫木和歌抄に引載されてかねてから知られてゐたのであるが、その全貌は本書の發見によつて初めて明となつたのであつた。今繪様を窺ふに足りる部分を抄出するに、

このみみしつるぎのえだにのぼれとてしものひしをみにたつるかな
くろがねのつめのつるぎのはやきもてかたみにみをもほふるかなしき

地獄變と六道繪

おもきいはをもひろちひろかさねあけてくだくやなにの報いなるらむ
すなはとまうす物うちてみをわりけるところを

つみ人はしでの山邊のそまぎかなをのつるぎにみをわられつつ
ひとつみをあまたにかぜのふききりてほむらになすもかなしかりけり
なによりはしたぬくこそかなしけれおもふことをもいはずじのはた

くろきほむらのなかにをとこをみなもえけるところを（歌略）

わきてなほあかがねのゆのまうけこそ心にいりてみをあらふらめ

あみだのひかり願にまかせて重業障のものをきらはす地獄をてらした
まふにより、地獄のかなへの湯清冷のいけになりて、はちすひらけた
るところをかきあらはせるを見て（歌略）

えむまの廳をいでて罪人をぐしてごくそつまかる。いぬゐのかたにほ
むらみゆ。罪人いかなるほむらぞと獄卒にとふ。なむちがおつべき地
獄のほむらなりと獄卒の申すをききて、罪人をのきかなしむと、ち
ういん僧都と申しし人説法にし侍りけるをおもひいでて

ゆくほどはなはのくさりにつながれておもへばかなしかしくびかし
かくてちごくにまかりつきて、ちごくの門ひらかむとて罪人をまへに
すゑて、くろがねのしもとをなげやりて、罪人にむかひてごくそつつ
まはじきをしかけていはく、このちごくいでしことはきのふけふのこ
となり。いでしをりに又かへりくまじきよしあへすくゝをしへき。ほ
どなくかへりいりぬること人のするにあらず、なむちの心のなむちを
又かへしいるるなり、人をうらむべからずと申して、あらしめより涙
をこぼして、ちごくのとびらをあくるおと百千の雷のおとにすぎた
り。（歌略）

さてとびらひらく。はざまよりけはしきほのほあらくいでてさい人の
みにあたるおとのおびただしさ、申しあらはすべくもなし。ほのほに

まぐられて罪人ぢごくへいりぬ。とびらたててつよくかためつ。ごく
そつうちうなだれてかへるけしき、あらきみめにはにずあはれなり。
かなしきかなや、いついづべしともなくてくをうけむことは、たゞぢ
ごく菩薩をたのみたてまつるべきなり。その御あはれみのみこそ、あ
か月ごとにほむらのなかにわけいりて、かなしみをばとぶらうたまふ
なれ。地獄菩薩とは地藏の御なり。(歌略)(註)

次に古事談第四に

義家朝臣依無懺悔之心遂墮惡趣畢。病惱之時、家ノ向ナリケル女房
之夢ニ、地獄繪ニ書タルヤウナル鬼形ノ輩、其數亂ニ入彼家ニ捕家主、大
札ヲ先ニ持之將出ケリ。札銘ニハ無間地獄之罪人源義家ト書タリ。

とあるは、文中「地獄繪ニ書タルヤウナル」とある如く當時の人々
が見慣れてゐた地獄繪の印象から生れ出た夢想であつて、間接に地
獄繪の圖相を物語る文獻と解することができる。

平安時代の地獄變の遺作の現存するものは極めて乏しく、獨立の
畫面は一もないが、中尊寺紺紙金泥一切經中の見返繪に若干の實例
がある。その一は般若經卷五の猛火燃ゆる錢とその傍に獄卒ども
の立つてゐる圖、その二は同卷四十の鐵壁に圍まれた地獄とこれを
とぶらふ地藏菩薩を畫いた見返(圖版第五參看)、その三は同卷六十三
の三惡道の圖、鐵碾で罪人を搗つてゐる獄卒と餓鬼及び畜生の姿と
を畫いたもの(圖版第六參看)、などがそれであつて、文獻と併せて上
代地獄繪の内容を考ふべき貴重な實例と云ふべきであらう。

今、これらの畫面を佛説と照し合せてみると、管見の及ぶ處では
次の如き關係が見出される。

和泉式部の歌所見のもの

有鐵設拉末梨林、彼諸有情……登其上。當登之時、一切刺鋒悉廻向下、欲
下之時、一切刺鋒復廻向上。由此因緣、貫刺其身。(瑜伽師地論卷四)

西行の歌「すなはとまうす物うちて云々」所見のもの

執取罪人、以熱鐵繩處々拼度。拼度訖已、以熱鐵鈇熾燃赫突交横而斫、彼
地獄中衆生身分或作二分、或作三分四分五分乃至十分或廿分或五十分或復
百分。譬如世間善巧木匠取諸材木安置平地、使用墨繩縱橫拼度、拼度訖
訖、即以利鈇隨而斫之、或作二分或作三分四分五分乃至十分、或廿分或復
百分。(起世經卷三黑繩地獄條)

同「なによりはしたぬくこそ云々」所見のもの

閻魔羅人、熱炎鐵鉗拔出其舌、拔已即生。生則軟嫩、而復更拔。(正法念
處經卷九大叫喚地獄條)

同「わきてなはあかがねのゆの云々」所見のもの

閻魔羅人取地獄人置彼河中。……河中非水、熱赤銅汁、漂彼罪人。(正法
念處經卷六黑繩地獄條)

以鐵鉗強壁其口、洋赤銅汁灌口令飲。(同卷七叫喚地獄條)

同「罪人をぐしてごくそつまかる云々」所見のもの

以黑鐵繩反縛其手復縛其足……惡業羅縛出向地獄。……如是罪人闇中遠見
彼大焦熱大地獄中普火焰燃。……聞大焦熱地獄中地獄罪人啼哭之聲。既聞
啼哭十倍恐魄、心驚怖畏。閻魔羅人如是將送向大焦熱大地獄去。閻魔羅人
呵責之故、而說偈言、……汝人中造惡、惡業已多作、如是惡業果、今者將
欲受。……(正法念處經卷十一焦熱地獄條)

中尊寺經見返の一

令頭在下置鐵錢中。彼人如是在鐵錢中頭面在下、經百千年湯火煮之。(正

法念處經卷七叫喚地獄條)

同の二

彼處火燃、周圍鐵壁高十由旬。彼地獄處大火常燃。(同卷五等活地獄條)

同の三

守獄卒即前提取受罪衆生、仰撲置於鐵砧之上、更取大石從上壓之。壓已復壓、因更研之。研已復研、遂成碎末。(起世經卷三鐵磔地獄條)

熱鐵臼中搗之令碎。(大智度論卷十六合會地獄條)

右は直接經典と參照したのであるが、その大部分は往生要集大文第一厭離穢土章八大地獄條にも見える處であつて、それから出てゐるものもあることと思ふ。猶菅原道雅女歌所見のものは偽經である地藏菩薩發心因緣十王經の

所渡有三、一山水瀨、二江深淵、三有橋渡。官前有大樹、名衣領樹。影住二鬼。一名奪衣婆、二名懸衣翁。……婆鬼脫衣、翁鬼懸枝、顯罪低昂。

赤染衛門歌所見のものも同經の

官廳大殿左右各有一舍。左秤量舍、右勘錄舍。左有高臺、臺上有秤量幢。業匠構巧懸七秤量身口七罪、爲紀輕重。……至秤前時、秤鍾自動自然低昂、課亡人言、汝所造罪秤目定重。亡人歎曰、我未昂秤聞何爲、我不敢不信之。爾時訪羅取於罪人、置秤盤上、秤目如故。

とあるに據れるものであり(後者は或は預修十王生七經の「五官業秤向空懸、左右雙童業簿全、輕重豈由情所願、低昂自任昔因緣」に據つたかとも思はれる)、辨乳母の歌所見の「死出の山」亦同經の「死天山」を畫いたものであつて、本來の佛說でない要素を畫いた

もののあることは注意を要する。中尊寺經の二及び西行歌所見のものに地藏菩薩を畫いてゐるのも、同經の「金剛願地藏、左持閻魔幢、右手成辨印、入地獄救生」などとあるに基いて平安時代に流布した地藏信仰(例へば地藏菩薩靈驗記上卷阿清房條及び今昔物語卷十七第十八話、靈驗記卷中但馬前司條及び今昔卷十七第廿一話、靈驗記卷中仁證條其他に見える如き)に據つたものであらう。

(註) 大串純夫氏は「十界圖考下」(美術研究第百二十號)の六の註五に西行の開書集の地獄繪の讃歌を引いてその畫面を來迎寺十界圖と對照され、その中で開書集の「よのなかに武者おこりてにしひむがしきたみなみいくさならぬところなし云々」とあるを十界圖人道苦相の場に當るものとされたが、然しこの歌は西行が源平合戰の事實を詠じたもので、地獄繪の讃歌ではない。地獄繪の讃歌はこの歌の直前で終つてゐるのである。

中世の地獄變と六道繪

平安時代の終に近き承安三年建春門院の御願により最勝光院が建立されたが、吉記の同年七月九日條に據れば、院は「御堂障子繪可_レ被_レ畫」法花經佛像并地獄之類、全不可_レ憚之由有_レ仰」つたと云ふことである。地獄變は壁畫と屏風繪との外に寺院の障子繪にまで畫かれたことが知られる。閑居友に據れば、建禮門院が大原に籠居せらるるやその御庵には「心をしづむべきふみども、ならびに地獄ゑなどさもおぼえてならべをかれた」と云ふ。鎌倉時代に入ると、地獄繪は六道繪の一環を成すものとして更に繪卷物の領域にもあらはれて來た。前引西行の詠じた地獄畫も或は繪卷ではないかと思は

れる節があるが、確なことは分らない。然しながら眞經寺文書天福元年三月十日附尊性法親王の御書簡には「抑御繪目六返進上候。此内十二櫃并第九櫃六道御繪、此等を廻可_レ申出_二之由思給候_一」、同廿二日右大將家嗣宛御書狀に「兼又先度申入候六道繪并第廿櫃と西京堅女繪櫃と可_レ被_二申出_一候」と見え、當時蓮華王院に六道繪が尙藏されてゐたことが知られ、これ以前既に六道を主題とした繪卷物の成立した事實を示してゐるのである。下つて洞院公定日記永和三年三月八日條に

終日雨下。冷然之間、六道繪申_二西園寺_一披覽之了。

後鑑嘉吉元年四月廿九日條所引西園寺公名公記に

昨夕中山以_二使者_一室町殿爲_二一見_一令_二尋_一繪給。雖爲_二如何様之繪_一可_レ進之由示_レ之。仍六道繪召_二進之_一。今朝以_二和景_一送_二遣中山許_一了。

看聞御記嘉吉元年五月九日條に

持經朝臣六道繪_二合十一_一入_二見參_一。片時電覽、則返遣。是西園寺繪也。

とそれ_レ見え、室町時代の初め頃西園寺家に少くとも十一卷にわたる六道繪が傳來してゐたことがはれる。而して今日鎌倉時代の作品と覺しき一聯の繪卷物が地獄草紙、餓鬼草紙、病草紙等の名で傳はつてゐることは周く人の知る通りである。鎌倉時代に於ける蓮華王院の六道繪と室町時代に於ける西園寺家の六道繪と現存地獄草紙餓鬼草紙等一群の繪卷物とが同一の作品であることを斷定するに足る積極的な資料は未だ見出されないけれど、現存の右一群の繪卷物が統一ある聯作と認められることと、鎌倉室町の古記に地獄

草紙乃至病草子の名の全然記されてゐないこと等を理由として、現存地獄草紙以下が古記の所謂六道繪に該當すると判定された福井利吉郎氏の見解は、まづ今日動かすことのできない斷案ではなからうか。

六道繪は繪卷物の外掛幅としても畫かれた。今日來迎寺には十界圖と呼ばれる十五幅の掛繪が傳はつてゐるが、これが實は鎌倉室町時代の古記に散見する叡山の傳金岡筆六道繪（例へば後愚昧記貞治二年二月十六日條に「任承法印……持_二金岡筆六道繪_一見_レ之。事體無比類_二重寶也_一」、二水記大永五年三月十五日條に「比叡山靈寶并六道繪_{十五}及被見候處、金岡筆。畏禮了」と見える處の）であることは、夙に福井氏（岩波講座日本文學「繪卷物概説」下附錄八頁）が、次いで大串純夫氏（美術研究第百十九號「十界圖」がそれ_レ）推定せられた通りであり、我々は前の六道繪卷と併せて、二の大規模な六道繪の作品を今日までのあたり見ることができるのである。その外獨立の主題として取り扱はれてゐるのではないが、北野天神緣起日藏六道廻の一段も亦六道繪の遺作として注目すべく、春日權現驗記その他にも地獄等の描寫が散見してゐるが、それらに就いては今悉く省略に従ふ。

ただここにもどうしても省略できないのは、鎌倉末から室町時代にかけ南都にも六道繪と呼ばれる、或は六道繪的要素を含む繪卷物の存在した事實である。その資料の一は、福井氏の紹介せられた塵袋第五の「南都ニ常明ガカタル數卷ノ六道ノ繪アリ。畜生道ノ分ニ土蛛ヲカツラノ綱ヲシテトラヘタル事ヲカケルニハ、ヲソロシゲナ

ル大蛛ヲ書タリ」と云ふ記事であり、南都に畜生道を含む數卷の六道繪があつたと云ふ。その資料の二は實隆公記文明十年三月廿六日條の「晚頭有召之間參候。□□畏繪奈良靈物。以ニ大般若經料紙。依ニ託宣。六百卷寫圖者。殊勝之由有勅語。當相殘云々。拜□之。人間病苦之體、鬼界飢渴之憂、地獄苦痛之趣等、感涙銘肝、更驚無常者也。深更退出」と云ふ記事であつて、題目は文字缺損のため明でないが、「人間病苦之體、鬼界飢渴之憂、地獄苦痛之趣」と云ふ、恰も現存病草紙餓鬼草紙地獄草紙にそのまま符合する内容をもつた繪卷物が「奈良靈物」として文明年間に存在したことを傳へてゐる。その資料の三は大乘院寺社雜事記や御湯殿の上の日記等に散見する「片岡繪」の記録である。大乘院寺社雜事記文明三年二月廿七日條に

一、慈恩院之片岡繪事、以ニ松林院借用之處、悉以修南院ニ在之云々。可借給云々。此條不審事也。彼繪ハ慈恩院相承者也。慈恩院事東院之光曉僧正相計時分より少々ハ東院ニ奉納。然之間此繪表書ニ、或東院或慈恩院書之。今悉以修南院ニ在之條、不思議事也。

尺迦因行 同八相 八大地獄
餓鬼 人道

大乘院寺社雜事記文明三年八月十日條裏文書に

片岡繪事度々奉候。如此令破損之間、修復事經師ニ尋候へば、如法大儀ニ申候。せめて細工ニ沙汰させ進上度心中にて、雖延引候、其もきと難事行之由申候。とかく遅々不可然之間、先進上候。續目共離候所々やう／＼に續候之間、旁遅々候。尺迦因行者慈恩院ニハ當時候はず候。失墜候哉不見候。東院に一卷候はんかしと覺候間借用候處、其も失墜之由

被申候。恐々謹言。

卯月廿二日

(端裏書)
松林院御坊

□□

□□

とあつて、「八大地獄、餓鬼、人道」とこれ亦現存の地獄餓鬼病各草紙に當る部分をもつ片岡繪と稱する繪卷物が奈良慈恩院に傳はり、文明年間には修南院にあつた事實を知ることができよう。その量は、御湯殿の上の日記延徳三年八月十七日條に

南とのしゆ南院より御ゑまいる。五十五くわんあり。

同廿七日條に

かたおかのを返しつかはさる。

大乘院寺社雜事記延徳三年九月晦日條の繪注文に「片岡繪五十二卷、慈恩院」と見え、五十數卷に及ぶ大規模なものであつたことが確められるのである。これら南都傳來の六道繪乃至六道繪的要素を含む繪卷物の性質やそれらと現存六道繪卷との關係について、私は未だ十分に之を辨識することができないのであるが、六道繪の研究の將來に遺された問題として、一應資料だけを提出して今後の解明に俟つことと思ふ。

地獄變及び六道繪の典據

地獄變と六道繪に關する中世までの史實は大體以上で盡きるかと思ふが、猶、これらの繪畫が如何なる典據に基いて圖畫せられたか、又かかる繪畫が如何なる精神的欲求に基いて産み出されたか、

當時の人々がどの様な心を以てこの特異な畫面に對したか、と云ふ重要な問題が遺されてゐる。よつて次に右の問題をまづ典據の検討から考へてゆくこととしよう。

地獄變については、既にその圖様の明なものに就きその典據に擬せられる佛説を掲出して置いた。地獄説は一切經の中にひろく散説せられてゐるから、さきに指摘したものが必ずしも當該圖畫の直接の典據ではないかもしれないけれど、まづ一般に佛説として行はれた八大地獄の説や地藏信仰、十王説などに據つて圖畫せられたものであることは肯定せられると思ふ。佛名會の地獄屏風が佛名經を背景としてゐることは勿論であるが、その圖様が全面的に佛名經に據つたものであるかどうかは、今日何とも云ふことができない。

この點について最近小林太市郎氏は新著「大和繪史論」所收の「辟邪繪卷に就て」及び「佛名と沙門地獄草紙」なる二篇の論文に於いて、益田家本地獄草紙の内に佛名經に説く沙門地獄を畫いた一巻のあることを指摘し、地獄草紙は内裏の佛名會屏風の圖様を移したものであると斷じ、又同じく益田家本地獄草紙の他の一巻が乾闥婆鐘馗等の邪鬼を退治するさまを畫いてゐるのを根據として、内裏地獄變屏風の中には宋より渡來せる爆仗屏風の辟邪圖の圖様が含まれてゐた、と論ぜられた。これは誠に注目すべき新説であつて、ことに鐘馗等を畫いた一巻を辟邪圖とすることは、從來十分な説明のつかかなかつたこの一巻の性質について有力な解釋の鍵を提供されたものとしてその鋭い洞察力に深く敬服するものである。然しながら

假りにこの一巻が辟邪圖であるにもせよ、現存地獄草紙が内裏佛名會屏風の圖様から出たものであり、内裏佛名會屏風に爆仗屏風の圖様が含まれてゐたとされる氏の高論には、幾多承認しかねる難點が存するのであつて、ここに少しく疑問を擧げて氏の高論を仰ぎたいと思ふ。

第一に、氏は承平天慶より長徳頃迄五六十年の間吳越との交通が盛んに行はれ、彼の地より辟邪圖を畫いた爆仗屏風が齎され、我が國では「早速に之を用ひて若しくはその意匠を採つて、歳末辟邪の御佛名の節物とし」「竟に之をも地獄繪御屏風と呼んだものと推される」(大和繪史論 三〇三頁)と云はれるが、我が内裏に於いて地獄變屏風の用ゐられたのは、上に述べた通り承平天慶よりも遙かに前の寛平六年以前まで遡るのである。既に久しく傳統的に踏襲されて來た佛名會地獄變屏風に途中から全く性格を異にする爆仗屏風を組み合せて兩者を同じ地獄屏風と總稱すると云ふが如きことは、故實を重んずる平安朝貴族に於いて到底有り得べからざる處としなければならぬ。また事實承平天慶の頃に於いて地獄變屏風の實質に左様な大きな變化の生じたことを示す資料は一も存しないのである。

第二に、氏は「まさしく地獄繪御屏風と同じ沙門の地獄を描ける地獄草紙とならびにこの辟邪圖卷とが共に二巻の地獄草紙として徳川時代まで世に傳はれる」事實に注意され、「その制作當初すなはち鎌倉時代の初期よりして、既にその名を以て呼ばれてゐたらし」(七二頁)とし、そのことは「往古に於ても亦この沙門地獄繪と辟邪圖

とが共にならんで同じ一聯の御屏風の上に現はされてゐたといふことの一の傍證になる」(二九頁)と云はれるけれども、氏が重要な傍證とされる「地獄草紙」の稱呼は實は徳川時代にはいつて始めて發生した新しい名稱であつて、決して鎌倉時代の如き古からの稱呼ではなかつた。尠くとも室町時代までこれらの繪卷物が「六道繪」の名のもとに呼ばれて地獄草紙と呼ばれたことのなかつた事實は既に説いたとおりであり、後世に於いて新しく發生した地獄草紙の稱呼はその源流を考へる上に何の役にも立たないことを知らねばならぬ。

第三に、氏は爆仗屏風の辟邪圖が内裏地獄變屏風に畫かれてゐたことを示す證據として、和泉式部の「地獄の繪に劔のえだに人のつらぬかれたるを見てよめる、あさましや劔の枝のたわむまでこは何のみのなれるなるらむ」の歌を挙げ、これは辟邪繪卷の梅檀乾闥婆王が十五鬼の首を三叉戟の三枝に刺し貫いた圖と同じ圖を詠じたものであるとされる(二九五―二九九頁、四〇八頁)が、右の歌をかやうな畫面の描寫と解することは歌句に對するきはめて無理な解釋であり、あまりに牽強附會の論と云ふべきではなからうか。劔の枝に木の實の如く人が刺されて枝がたわむやうに見えるると云ふ以上、どうしても劔の枝から成る樹木が畫かれてゐたと解せざるを得ない。この歌句に従ふ限り戟の枝に鬼の首が貫かれてゐる光景を想像することは全く不可能である。しかもこれと同じ構圖を詠んだものに前引辨乳母の「いかにせん劔の枝のたはむまでもおもきはつみのなれるなりけり」と云

ふ歌があつて、詞書によればこの歌は十齋堂の地獄繪を詠じた作である。小林氏の云はるる如く假に辟邪圖が佛名會の地獄屏風にとり入れられる可能性ありとしても、佛寺の十齋堂にもそれが地獄繪として畫かれるいはれはない筈であるから、その點からしてもこの圖を辟邪圖中の乾闥婆王の十五鬼の首を刺し貫いた圖と考へる根據は否定せられねばならぬであらう。私はこの圖はやはり上述の通り鐵設拉末梨林又はその類の劔樹を畫いた圖と解すべきであると思ふ。西行の見た地獄繪にも「つるぎのえだ」が畫かれてゐるが、この場合には「のぼれとて」の歌句が明に「つるぎのえだ」が劔樹であつたことを物語つてゐる。和泉式部の歌が果して内裏屏風を見て詠んだものであるかどうか、氏の挙げらるる寶物集の如き後世の文獻で之を斷定することはむづかしいと思ふが、たとひさうであるとしても、これを以て内裏地獄變屏風に辟邪圖の畫かれてゐた證據となし得ないことはもはや疑ふ餘地のない處である。この様にして小林氏の益田家本地獄草紙の圖様が内裏地獄屏風に由來したとなす新説の根據は悉く崩壊するのではなからうか。

猶枝葉にわたることながら次の二點を序に付け加へて置く。第一に、小林氏は和泉式部や清少納言の見た内裏の地獄變屏風は長暦三年の火災に焼失し、その後「崇徳天皇の世に到つてはじめて古き七帖の御屏風に代る新御屏風が造られたのであるが、辟邪繪卷及び沙門地獄草紙はまさしくこの新しき地獄繪御屏風の圖によつて畫かれたものと思はれる」(四〇頁)と云はれる。然

しながら地獄變屏風が焼失の有無にかかはらず佛名會のために屢々新調せられたことは、前に引いた御堂關白記や兵範記裏文書によつて知られる處であつて、新舊各一種類しかなかつたかの如き前提を抱いていろいろ論ずることは適當でないと思ふ。

第二に、氏は「永延正暦頃の名媛がみな『地獄繪の御屏風』といへるものを、院政時代の有職家がすべて『地獄變御屏風』と記せることは甚だ注目される。それは時代による相違かとも思はれ」る(四〇六頁)と云はれたが、地獄變と云ふ稱呼は前に引いた通り北山抄や御堂關白記に既に見え、決して院政時代に始る稱呼ではない。歴代名畫記に據るに、これが大陸以來傳統の名稱であつたのである。瑣事ながら序に一言して置く。

以上私は小林氏の優れた研究に對し非禮の言をつらねて來たが、益田家本地獄草紙が内裏地獄變に由來したと云ふ點は賛成し難きも、沙門地獄草紙一卷が佛名經を典據とすると云ふことと他の一卷が辟邪圖的要素をもつと云ふことを發見せられたのは、學界に對する大きな寄與であつたと云はなければならぬ。辟邪圖と云はれる一卷のみについては猶多くの問題が遺されてゐるが、とにかく氏の洞察により現存地獄草紙の典據として、從來明にされてゐた正法念處經と起世經との外、新に佛名經を加へることができることとなり、ここに地獄草紙のそれらの典據が一應明にされたのである。然らばこの地獄草紙を含む六道繪全體は如何なる佛説を背景とするものであらうか。これが次に解明せらるべき問題であると思ふ。

この問題について具體的な解答を與へたのは、今までの處福井利吉郎氏の「六道繪卷解説」附録「六道繪所因論」がほとんど唯一のものである。氏は「六道繪統一論」に於いて地獄餓鬼病の諸卷が一聯の六道繪として統一されることを證明し、つづいてこの論に移り、法華經譬喻品に三界の火宅とは諸の衆生の生老病死憂悲苦惱に焼煮せられる所、現には衆苦を受け後には地獄畜生餓鬼の苦を受け、天上に生れ人間に在つては又種々の諸苦を受ける所等と云ひ、特に人間については精神的に肉體的に最も憐むべき不具者のあらゆる種類を列敍して餘す所がない事實、及び富山縣本法寺の法華經曼荼羅譬喻品の一幅に六道全體の縮圖とも見らるべき經繪の存在する事實を主なる根據として、「六道繪の所因は法華經譬喻品を主とし、序品方便品を副とす」と断定された。氏は亦「解説」の冒頭に平家物語源平盛衰記の建禮門院六道めぐりの哀詞を引き、六道繪は正にこれらの「文學とも相呼應するものである」との結論を下して居られる。この見解がきはめて卓抜なる推論であることは申すまでもないが、然しながら果して六道繪は氏の云はるる如き「法華經繪」であらうか。これは甚だ問題ではないかと思ふ。成程法華經の譬喻品を中心とする冒頭の三品には部分的に六道の苦相を描寫するものなしとせざるも、六道全體を統一的に説いては居らず、「六道」とか「地獄」「餓鬼」「畜生」等の言葉は散見するけれども、地獄や天上の具體的説明をほとんど缺くのみならず、修羅道についてはその名目さへあらはれて來ないのである。方便品譬喻品の趣旨は三一權實

の理を明にするにあり、六道の苦相を描くのが目的ではない。六道繪を以て法華經繪とすることは、法華經に左様な目標が含まれてゐない以上、困難ではなからうか。私は六道繪の典據は六道の苦相を正説する佛書に求めるのが最も穩當かと考へる。而して六道繪の苦相を正説するものと云へば、何人も直ちに想ひ浮べるのは源信の往生要集である。この最も因縁深かるべき書を措き、強ひて法華經の斷片的辭句と結合するのはいささか迂遠の道ではないであらうか。福井氏は六道繪が平家や盛衰記の女院六道めぐりと「相呼應するものである」と云はれたが、この女院六道の物語が寶物集を仲介として源信の二十五三昧式乃至往生要集に由來することは既に後藤丹治氏が明にされた處であり（戰記物語の研究前、篇第二の第二章）、然らばこれと「相呼應する」六道繪の所因も亦源信に求めるのが自然の順序ではあるまいか。康賴寶物集に

女聞テ、……サテモ此六道トノ給ヘルハイヅクヲ申侍ゾト問ヘバ、此僧答テ云ク、六道ト云事ヲ知ヌ人ヤ侍ル。此世ニハ五、六ノ少キ者ヤアヤシノ下郎迄モ皆知テ侍ル物ヲ。サレドモ……ヲロ／＼可レ申。心ヲ留テ聞キ給ヘヨ。六道ト申ハ地獄餓鬼畜生修羅人間天上此等ヲ申侍ル也。……此女又問テ云ク、先ヅ地獄餓鬼畜生ノ有情ハイカヤウニ侍ルゾヤト云ヘバ、僧答云ク、六道ノ事ハ天台山ノ住侶惠心院ノ源信僧都ノ一代聖教ヲ開テ撰シ給ヘル往生要集ト云文コソコマカニハ注シテ侍ルメル。イマダ見給ハズヤ、ヲロ／＼申侍ベシ。

とあるのを見ても、平安末鎌倉初期に六道と云へば往生要集を直ちに考へるのが時代の常識であつたことが理解せられる。とすれば、

六道繪の如き六道を主題とした藝術も亦源信の思想を母胎として生れ出たとして置くのが、その頃の時代思潮に最もよく符合するものではないかと考へられるのである。前にも一寸觸れた様に、來迎寺に現存する所謂十界圖は中世にあつては六道繪と呼ばれてゐたのであり、しかもそれは往生要集の忠實な繪解きであることが前引大串氏の研究により明となつたのであつた。凡同じ時代に同じく六道繪と呼ばれた二種の作品の一方が往生要集に基いてゐるとすれば、他の一も、たとひ個々の畫面が要集の文に據つてゐるのではないにしても、やはり同じ背景の下に理解するのが適當であると私は信ずる次第である。

地獄變及び六道繪の精神的意義

藝術の「典據」を明にすることはその思想的背景を明にすることでもある。然し典據を明にしても、かかる典據に基きかかる藝術を産み出した主體的要求の内容は未だ明にせられたとは云へぬ。往生要集が六道繪の思想的背景であるとするならば、更に一步進んで往生要集に基き六道繪を製作した時代人の精神的動向の實相如何を明にするのが、最後に解かるべき課題である。

思ふに、地獄の觀念は日本靈異記などの所説でも知られる通り、最初は佛家の方便的勸戒の具として有効に利用せられたものであらう。尊意の逸話などによつて考へられる如く、寺壁の地獄繪はたしかに童蒙をして佛説に聽從せしめるに足る強い恐怖を起させるに十

分な方便であつたに相違ない。地獄繪が本來の使命をさう云ふ處に
もち、後世に至る迄無智の善男善女に對し同じ効果を與へてゐるこ
とは事實であるが、地獄變の我が精神生活の歴史に於いて演じた役
割は今少しく深いものがあつた様に思ふ。換言すれば、それは單な
る佛教宣傳の具であるにとどまらず、人々の切實なる罪業感の藝術
的表現と云ふ意味を有つてゐたのである。尊意が吉田寺の畫壁を見
て忽ち遊樂の心を棄て入山の志を發したと云ふも、單なる死後の痛
苦に對する恐怖からではなかつたかもしれぬ。後世のことではある
が、三條西實隆が奈良の靈物に接した時の感想を見ても、餓鬼地獄
等の痛苦が人界の「無常」の象徴として「銘肝」じてゐることが窺
はれるのである。源信が往生要集の劈頭にまづ八大地獄の状況を精
細に敘述して「諸行者疾生厭離心」せしめんことをはかつたの
も、亦地獄の痛苦が其儘人界の厭相を了得する緣由たり得たからで
あらう。佛名會に於いて地獄屏風が立てられたのも、その醜惡を凝
視することによつて罪障の自覺を深めようとする意圖が潜在してゐ
たものと想像されるのであるが、然しながらたとひ人生の無常と我
が身の罪深きを感じる心をもつとは云へ、猶現世的悅樂に強く執着
し花やかなる榮花の生活に耽溺してゐた平安貴族及びこれを圍繞す
る知識人たちにとつて、かう云ふ題材に眞剣に直面することはかな
り困難であつた様に思はれる。枕草子によれば清少納言は地獄繪屏
風に接し

ゆゆしういみじきことがぎりなし。これみよとおほせらるれど、さらに見

侍らじとて、こへやにかくれてふしぬ。

と云ふ態度を示してゐる。これは王朝人の心理を最も赤裸々に表し
たものであつて、彼女の如く其の外形に對する嫌惡の爲めに眼をそ
むけるか、然らざれば和泉式部の如き輕き遊戲的態度を以て看過し
去るか、何れにするも地獄變のもつ精神的意義と彼等の生活との間
には越え難き溝が存したのであり、かかる素材は未だ時代の眞に
要求する處となつてはゐなかつたのである。然るに保元平治の戰
亂、平家の滅亡等平安末期以來のうちつづく爭亂による秩序、生
命、財産の覆滅、傳統と權威との無慘なる破砕は、かかる事情を全
く一變せしめた。この深刻なる體驗は人をして地獄はじめ六道の厭
相が後の世ならぬこの人界のすがたに外ならないことを今や初めて
明瞭に理解せしめないではおかなかつたのである。

我身入道相國ノ娘トシテ何事ニカ乏候シ。一門ノ榮花ハ堂上花ノ開ガ如
ク、萬人ノ群集ハ門前ニ市立ルニ異ナラズ。彼極樂世界ノ莊嚴モ菩薩聖衆
ノ快樂モ爭是ニハスギント覺候キ。去養和ノ秋ノ初七月末ニ木曾義仲ニ都
ヲ落サレテ、行幸俄ニ成シカバ、九重ノ内ヲ迷出テ、八重立雲ノ外ヲサ
シ、憑便モナク寄方モナカリシ事ハ、是ヤ此天ノ上ノ五衰、退没ノ苦ナラン
ト覺キ。今度人界ニ生テ、愛別怨憎ノ苦ヲ受、盛者必衰ノ悲シミヲ含タ
リ。人間ノ事ハ今更申ニ及ズ。一谷ト云所ニテ一門多ク亡シ後ハ、明テモ
晚テモ目ニ見ユル物ハ弓箭兵杖ノ具、海ニモ陸ニモ耳ニ聞ユル者ハ矢叫軍
呼ノ聲ノミ也。修羅道ノ苦患モ經タル心地シ候シ。山野廣シトイヘドモ休
マントスルニ所ナシ。國々悉塞テ御調物モカマヘネバ、供御ヲ備ル人モナ
シ。餓鬼道ノ苦ニ異ナラズ。一谷ヲ落サレテ後ハ、夫ハ妻ニ別、妻ハ夫ニ

別、親ハ子ヲ失ヒ、子ハ親ニ後デ、叫喚音船中ニ充滿、泣悶ル音陸ノ側ニ盡ザリシカバ、叫喚大叫喚ト覺タリ。源平互ニマケヌレバ、首ヲ刎足手ヲ切、身ハ紅ト染ル時ハ、等活地獄トモ覺タリ。讃岐國屋島ヲモ源氏ニ追落サレテ、一船ノ中ノ住居也シカバ、兄ノ宗盛ニ名ヲ立ト云、聞ニクキ事ヲ云ヲモ、又九郎判官ニ虜レテ、心ナラヌアダ名ヲ立候ヘバ、畜生道ニ云ナサレタリ。是ヲコソ自ハ六道ヲ經タリトハ申ニ候ヘ。(源平盛衰記卷四十八に據り節略抄引す)

畏くも國母の御身を以て生きながら六道を輪廻せられた建禮門院の御物語こそ、六道の厭相を現實世界の内に如實に看取せざるを得なかつた悲しき體驗の表白であり、同時に院御一身にとどまらず、ひろく時代の人々が身を以て體得した處の眞理であつた。既に六道即ち現實世界に外ならぬことを知る時、今更地獄の厭相を嫌惡し眼を覆つて何にならう、むしろその醜惡を勇敢に直視し、厭離の念を固くして欣淨の心を勵すに如くはない、といふ新しい精神がここに醸成されるに至つたのである。閑居友によれば建禮門院の大原の御庵には地獄繪が御身邊に置かれてゐたと云ふことであるが、嘗ては更に見侍らじと面をそむけた人のあつた昔を思へば、貴婦人の地獄繪に對する心情の根柢より變革せられたことが知られるであらう。かくて醜惡なる六道の藝術は時代精神の支持の下に新しい發展の段階に上るのである。地獄餓鬼病と云ふが如き醜惡きはまる素材が繪巻物として藝術的鑑賞の對象となると云ふことは平安朝に於いては有り得なかつた處であつた。閑居友には

むかしひえの山になにかしとかやいひける人のもとにつかはれる中間僧あり。としごろへて後、ゆふぐれにはかならずうせて、つとめてとくいでくる事をしけり。あるとき人をつけてみせければ、にしきかもとをくだりてれんだい野にぞゆきにける。このつかひあやしくなになわざとみければ、あちこちわけすぎて、いいしらすいまくしくみだれたる死人のそばにゐて、めをとぢめをひらき祈て、たび／＼かやうにしつつ、こゑもおしまずぞなきける。……天台大師の次第禪門といふ文に、をろかならんものつかのほとりにゆきてみだれくさりたらん死人をみれば、觀念成就しやうしと侍めれば、この人もさやうに侍けるにこそ。(あやしの僧の宮づかへのひまに不淨觀をこらす事)

と云ふ逸話を載せてゐるが、かくの如き行動の現實にあらはれてくる處にこそ、六道繪巻や來迎寺十界圖の如き藝術作品を産み出す精神的根源が存在したのである。平安朝貴族藝術に窺はれる淨土の莊嚴への憧憬から醜惡なる六道の厭相への直視と云ふ推移の裡に、我々は時代の大きいなる轉回を見出すことができるであらう。現存六道繪巻の内にはユーモアの要素が豊にたたへられて居り、この種の作品がよく藝術的鑑賞に耐へ得た理由としては、悲劇的素材中に混在するかうした喜劇的救済の分子に由るとも考へ得られるが、若し實隆公記に見られる實隆の六道繪鑑賞の態度を以て中世に於けるそれを代表せしめ得るとするならば、彼等は決してかゝる技巧の末を喜んだのではなく、素材そのもののものもつ深い形而上學的意義を了得することによつて併せてその藝術性を承認したものと考へざるを得ないのである。さうしてかゝる鑑賞態度を可能ならしめた根源は全く

平安末期に於ける悲痛なる社會的體驗による人生觀の更新に歸せらるべく、地獄變や六道繪の精神史的意義はこれを堺として新しい光を帯びるに至つたと云ふことができよう。

地獄變の製作は、しかし中世で終つたわけではない。江戸時代以後にも作例は尠くないのである。然しながら曾ては觀る者をして「感涙銘肝」せしめた同じ作品が「或ハ地獄或餓鬼ヲ寫シテ人ヲシテ酸鼻セシメテ勸懲ヲナサシメントス。愚蒙ノ態笑フベシ惡ムベシ」(好古小錄上)と云ふ嘲罵の對象と變じた近世に於いて、中世の如き存在を持続することは到底不可能と云はなければならぬ。事實この時期に作られた作品は、多くは獵奇にあらずんば風狂の爲めに畫かれたに過ぎなかつた。例へば曉齋の地獄變相の如きがそれである。その代り近世にはまた近世でなければ見られない特色ある作品も生れ出た。間引の防止と云ふ道德的勸戒を目的として畫かれた白河常宣寺の受苦圖が最もよい例であらう(社會經濟史學第(七卷第八號參照)。何れにしても地獄變はその背景とした形而上學的意義を完全に喪失したのである。